

様々な事案から災害活動を振り返る

今回は、大阪市内で要救助者7名(死者1名・傷者3名)が発生した大規模共同住宅における火災について紹介する。複雑な構造様式の中、屋内進入による消火活動を行った消火隊と指揮班の活動に着目し、今後の活動に役立てて頂ければと考える。

今回のテーマ

## 大規模共同住宅で複層火災、 覚悟を決めた先着隊



### 災害概況

#### ●構造様式

鉄骨造一部木造陸屋根モルタル塗4階建て共同住宅(建430㎡/延1320㎡)

#### ●焼損面積

1階30㎡焼損・88㎡表面焼損  
2階73㎡焼損・55㎡表面焼損  
3階120㎡焼損・70㎡表面焼損  
合計223㎡焼損・213㎡表面焼損

#### ●時系列

16時15分 出火(推定)  
16時29分 消防覚知  
16時29分 通常第一出場指令  
16時31分 警防計画適用特別第一出場切替指令  
16時33分 先着消火隊直近部署  
16時54分 応急救護所設置(火点西側)  
16時54分 警防計画適用特別第二出場指令  
17時08分 大隊指揮宣言  
17時53分 鎮庄  
23時40分 鎮火



### 西方面隊

#### 到着時の状況 (多数の手振り要救助者)

厳しい寒さが続く1月下旬、「火災指令N管内、高所カメラ情報黒煙あり」本部の指令情報センターから出場各隊に指令が響いた。先着隊到着時、2・3階には、救助を求める要救助者があり、出火階の1階及び延焼中と思われる2階からは黒煙が噴出していった。現場最高指揮者のN副署長は、火勢や要救助者の数から現出場隊では対応が困難だと判断し、増強部隊を即座に要請した。(写真1参照)

#### 複雑な構造様式 (困難を極める対象物の把握)

建物規模の状況、外観などから判断すると一見耐火構造と見えるような対象物だった。しかしながら、実際のところは、特定の部分(各部屋の扉や壁、建物北側の天井を含む全て)が木造であり、全く見た目では判断しかねる複雑な構造様式であった。木造と耐火での延焼速度や経路の違いがあるのは承知のところであるが、ここで重要とされるのは、それを、いかに早く知り得てその情報を各隊にフィードバックするか、といったところである。複層火災に至ることで対応策が変化し判断の遅れが延焼を拡大させ、火勢に対する消防力が劣勢となり消防隊の活動が後手後手となってしまいうからである。今回、先着して屋内進入した消火隊の小隊長は、燃焼状況を見て、「耐火構造の共同住宅の延焼状況とは、明らかに違う…」と判断した。また、常日頃における警防調査により、建物構造が一部木造であることを把握していたのである。「N小隊から指揮本部!本対象物にあつては木造建物、各隊に周知願う」指揮本部へ無線即報した。

#### 屋内進入し、奮闘する消防隊 (決死の延焼阻止活動)



写真1